今一度振り返るシラバス
授業設計の方法論に沿った作成法（上）

平成二十年に学士課程教育の構築が求められ、大学の講義も改革が進んできた。その一つがシラバスである。このたびは、改めてシラバスの書き方について、名古屋大学高等教育研究センターの中島英博准教授に解説してもらった。

名古屋大学高等教育研究センター准教授 中島英博

大学教員に定着したシラバス

シラバスという言葉は、今や全ての大学教員に定着した言葉と言える。平成二十年の大学設置基準改正や平成二十三年の学校教育法施行規則の改正により、シラバスのインターネット等を通じた公開が義務づけられ、全ての教員にシラバス作成が求められているためであろう。私立大学等改革総合支援事業の平成二十六年度申請結果によれば、「シラバスに到達目標の明記を求めている」という項目については、申請校の九五%、採択校の九九%が実施している。ウェブ入力が標準となり、到達目標という項目が設けられているため、教員は到達目標を示さざるを得ない。

一方、留学生や編入学生の単位互換業務等で学内外のシラバスを詳しく見ている職員の立場からは、シラバスの記述内容が不明確・不適切と思われる事例が少なくないようだ。多くの大学で来年度のシラバスの入力が行われるこの時期に、シラバスの作成方法を今一度振り返ってみたい。以下では授業設計の方法論に沿い、①優れたシラバス例を参照する、②ディプロマ・ポリシーを確認する、③五〇程度のCan-Doリストを作成する、④授業の目標と成績評価方法を定める、⑤授業の実施計画を作成するという順に見ていく。

優れたシラバス例を参照する

授業の計画を立てる際、多くの教員が前任者のシラバスや指導教員のシラバスを参照しているだろう。今日ではシラバスが公開されていることを活用し、担当科目と同様の科目のシラバスを参照するとよい。特に金沢工業大学が公開している「学修支援計画書」は、ディプロマ・ポリシー、到達目標、成績評価の方法と基準、授業時間内の学習活動、授業時間外の課題、授業の運営方法の間で高い整合性を保つよう設計された様式を用いており参考になる。

また、多くの大学で「シラバス作成の手引き」等を作成しているが、ウェブ入力の操作マニュアルに留まっている。しかし、到達目標・成績評価・授業計画の考え方と書き方を解説した手引きを公開している大学もある。特に、北海道教育大学と岩手大学が公開している手引きは、学外の教員でも参考になる内容である。

ディプロマ・ポリシーを確認する

次の段階は、ディプロマ・ポリシーの確認である。授業を設計する際に「何を教えたいか」という個人的な興味・関心から考え始めると学部や大学の教育目標と整合しなくなる。特に学士課程教育の構築では、学生が単に「何を知っているか」ではなく、知識の応用や活用が求められており、教室における教員の役割は、知識の伝達者ではなく「学生が思考するために働きかけること」である。そのため、教科書の解説を中心とする授業と比較して、教材・発問・学生が取り組む課題の準備が一層重要となる。

ここまで見た優れたシラバス例の参照と、所属組織のディプロマ・ポリシーの確認は、授業担当者の思考や発想を刺激し、学生が思考するために働きかける授業の全体を構想する上で有益であるため、シラバスの作成や改訂を始める前に取り組むことを薦めたい。

Can-Doリストを用意する

三番目は、学生が担当授業の終了時にできるようになっていること、すなわちCan-Doリストをできるだけ多く用意することだ。これには「労働力率の定義を知っている」「コルチゾンの作用と副作用を知っている」等の知識レベルから、「公開市場操作が短期金利に及ぼす効果を説明できる」「鼻腔・口腔から肺胞までの構造と生理を説明できる」等の説明・解釈レベル、「家計の労働力供給モデルを用いた分析ができる」「呼気障害を持つ入院患者のケア計画を立案できる」等の応用・統合レベルまで、できるだけ多く列挙する。リストを用意する際は、①カリキュラムの中に担当授業がどのように位置づけられ、何を教えることが期待されているか、②専門分野の学習者として獲得しなければならないことは何か、③卒業後の社会が学生に何を求めているかという三つの視点から列挙できるとよい。

多くの場合、一五週の授業では五〇程度のCan-Doリストができる。この作業の長所は、ディプロマ・ポリシーと担当科目の到達目標の対応関係を具体的に考えられる点である。教えることが知識に偏りすぎていないか、思考力、問題解決力、コミュニケーション力といった統合的な目標を担当授業ではどう扱うのかを考える作業であるためだ。五つの手順の中では、この三番目が最も重要な段階と言える。

授業の目標と成績評価方法を定める

四番目に、授業の目標と成績評価の方法を定める。三番目の手順でCan-Doリストができていれば、リストの内容を整理して三点から五点の「学生を主語にした行動目標」としてとして到達目標をまとめることになる。まとめ方は主に二つあり、「定理を知っている・基礎問題が解ける・応用問題に適用できる」「説明できる・応用する・評価する」といった認知の水準別にまとめる方法と、「理解する・解決策を提案する・協力して発表する」「情報を得る・説明できる・議論に貢献する」といった活動内容別にまとめる方法がある。

成績評価に関する項目は、学生が最も注目する項目であり、換言すれば教員のメッセージを伝えやすい項目である。成績評価は、どのようにして学生の成果を測定するかという「評価方法」と、それぞれの方法について何ができていると合格の水準であるかという「評価基準」の二つの要素で構成される。Can-Doリストに基づいて行動目標が設定されていれば、成績評価の方法と基準は半ば自動的に決まるものの、次の三点に留意する。第一に、知識面の評価に偏っていないかである。到達目標に技能・態度や思考力や応用力の獲得を示しながら、評価を期末筆記試験のみとすることは整合的と言えない。試験、レポート、クイズ・小テスト、口頭試問、調査発表など、到達目標の内容に対応するように評価方法を選択して示す。

第二に、評価基準を学生が自己評価できる形で示すことだ。例えば、レポートを用いる場合、「適切に問題が設定されている」「設定した問題の背景を説明している」「既存の学説を三つ以上あげている」「複数の学説の相違点を比較している」「既存の学説に基づいた自分の見解を述べている」のうち二つ以上を満たせば「C」、5つ全て満たせば「A」とするなどである。また、試験の場合、テキストの例題を解ければ「C」、テキストの章末問題が解ければ「B」、テキストの応用問題が解ければ「A」などだ。ただし、複数ある全ての評価方法についてこうした基準を示す十分なスペースがない場合は、「合格」「可」「C」の水準だけでも示すようにする。

授業の実施計画を作成する

一五回分の授業計画の作成も、Can-Doリストがあれば比較的容易に行える。例えば、一回で三つの項目を扱うように分類するだけで、四五程度の項目を扱う実施計画がまとまる。ただし、教室における教員の役割は「学生が思考するために働きかけること」であるため、Can-Doリストのうち知識の獲得部分については、必要な教材を示して予習や復習の課題とする方が効率的だ。教えるべきことが多すぎて時間が足りないと感じている教員も多いが、授業時間内では知識を活用する活動に焦点化することを薦めたい。近年はシラバスの入力様式で、授業時間内と授業時間外の学習活動を分けて記載する大学が増えている。つまり、授業時間外の学習課題や教材の準備が求められるようになっており、授業設計の重要性が高まっていると言えよう。

今回はウェブシラバスを作成する状況を想定してシラバスの作成方法を振り返ったが、次回は学生の学習を支援するためにシラバスを活用する方法に注目する。（つづく）

教育学術新聞2590号

今一度振り返るシラバス

学習支援にどうシラバスを活用するか

（下）

名古屋大学高等教育研究センター准教授　中島英博

ウェブシラバスの現状は履修選択用シラバス

前回はウェブシラバスを作成する状況を前提として、シラバスの作成方法を振り返った。今回は学生の学習を支援するために、シラバスを活用する方法に注目する。中央教育審議会が示した答申に添付された用語集において、シラバスは「学生が各授業科目の準備学修等を進めるための基本となるもの」と定義されている。確かに、多くのウェブシラバスで、講義の目的、到達目標、各回の授業内容、成績評価方法と基準、準備学習等の具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等を入力する項目が用意されている。しかしながら、実際にはウェブシラバスが、学生「授業選択用シラバス」としてしか機能していないのではないだろうか。授業の詳細な事前設計が求められている昨今、作成したシラバスを授業の中でも活用する方法を考えてみたい。

授業中に活用するシラバスを作成する

シラバスを「学生が各授業科目の準備学修等を進めるための基本となるもの」として活用するには、ウェブシラバスの内容では不十分だろう。ウェブシラバスでは入力できる文字数に上限が設けられていることが多く、限られた内容しか掲載することができないためだ。これは、かつて冊子で配布していた授業要覧をウェブに置き換えてきた経緯もあり、直ちに改善することは困難である。そこで、初回の授業で「学修支援用シラバス」を配布することを薦めたい。以下では、国外の大学で履修者に配布される「学修支援用シラバス」の特徴を、三点に絞って見ていく。その多くは、A4サイズで一〇頁から二〇頁程度の冊子である。

第一に、授業全体を概観する説明を示すことである。具体的には、「教員の授業設計の意図」「授業を通じて大切にする問い」「学生に期待する学習活動」「授業内容が社会で役立つ場面」などの内容である。毎回の授業開始時に振り返り、学生が何のためにこの授業に参加しているのかを確認するためのものである。図表を含めて一頁から三頁程度で示されていることが多い。

第二に、成績評価の方法と基準の具体例を示すことである。例えば、試験を行う場合は、過去問や模擬問題とその解答・配点を示す。また、レポートの場合は、課題やテーマを示すと共に、採点する観点と模範レポートの例を示す。採点の観点は「適切に問題が設定されている」「設定した問題の背景を説明している」「既存の学説を三つ以上あげている」「複数の学説の相違点を比較している」「既存の学説に基づいた自分の見解を述べている」のように、学生が一定程度自己採点できる形で示す。特に、レポート採点の基準は、表内の縦に評価の観点を、横に評価の尺度をまとめたルーブリックにして示しておくと、学生は教員の意図に沿ったレポートを作成しやすい。グループでの調査・発表・プロジェクト課題などを課す場合も同様で、過去の授業で優秀と評価した成果の例と、授業の到達目標に対応した評価の観点を示す。これらは三頁から四頁程度で示されていることが多い。

評価の方法と基準を具体的に示すことは、シラバスが学生に準備学習を促す機能を果たす上で重要である。また、過去問や過去の優秀レポートと採点基準を公表することで、試験での不正行為やレポートでの剽窃行為を防ぐ効果もある。逆に、教員自身が「到達目標と評価方法が整合しているか」「なぜこの評価方法を採用するのか」を明確に理解していなければ、具体例と採点基準を十分に示すことができない。

第三に、各回の授業で求める準備学習の内容を示すことである。私立大学等改革総合支援事業の平成二十六年度申請結果では、「準備学習に必要な時間またはそれに準じる程度の具体的な学習内容をシラバスに記載しているか」の項目について、申請校の七九%、採択校の九五%が記載している。しかし、実際のウェブシラバスでは具体的な文献情報を書く十分なスペースがなく、抽象的な記述に留まらざるをえない。学生に手渡すシラバスでは、事前に読む課題であれば文献の該当箇所を示すと共に、理解の状況を確認する小テストの例や授業の冒頭で問う発問を示すことで、学生の準備学習を支援することができる。

このようにシラバスを活用して学生の準備学習を促すには、シラバスに具体的な課題や練習問題を提示する必要がある。

国際化でシラバスの重要性が増す

管理職を務めた教員であれば経験のある方も多いと思われるが、留学生や編入生が他大学で取得した単位を所属大学の卒業単位として読み替える際に、授業の内容が同等か否かはシラバスを用いて判断する。しかし、シラバスの記述内容が不十分であると、最悪の場合は単位を認定できないことになる。例えば、自大学の学生が交換留学から帰ってきた場合を考えてみよう。国外の大学で履修した授業の単位を認定する際に、相手側の大学から示されたシラバスの記述が不十分である場合、職員は学生に授業中に配布された資料や学生が書いたノートから認定する単位数に見合う学習時間が費やされているかの根拠を探さなければならない。逆もまた同様であり、国外の学生を受け入れ、その学生が本国へ戻った際にも、相手側の大学は日本のシラバスに基づいて単位の認定を判断する。米国のように、先に示した「学修支援用シラバス」が定着した国では、日本の大学のシラバスでは不十分と判断され、学生が思わぬ不利益を被る可能性もある。国際化の推進により、シラバス作成の重要性は今後一層増加するものと考えられる。

なぜシラバスを作るのか

シラバスの作成は、授業を事前に細部まで設計することを意味するが、「授業は始まってみないとわからない」「学生の実態に合わせて進めたい」という理由から授業の設計は難しいという意見もある。確かに、事前の予想以上に学生の理解度が低い場合は、何らかの授業計画変更が必要だろう。しかし、学生の実態に合わせた結果、カリキュラムで求められた到達水準を満たせなかったことになると、学生の成長を保証する責任を果たしたことにはならない。授業を学生にあわせて臨機応変に進めるためにも、授業の詳細な計画が必要である。学生の理解度が予想よりも低い場合、教員が行う意志決定は、後戻りしてもう一度教えるか、除外して先に進むかのどちらかである。授業の計画があれば、どの部分を除外し、どの部分を重点的に扱うかの意志決定が容易になり、また対外的な説明を求められた際にも対応しやすい。しかし、事前の授業計画がないまま学生に合わせて授業を進めることは「行きあたりばったり」なものにならざるを得ない。

これ以外にも、シラバスの作成は習得が比較的容易なスキルであること、一度丁寧にシラバスを作成すると次年度以降の授業が楽になるなど、シラバスの作成と充実はいくつかの有用な側面がある。一度で完全なものを作ろうとせず、できる部分から取り入れ、数年で完成させる見通しの中でシラバスの充実を図っていくことが望ましい。

（おわり）